

李恢成對話集

参加する
言葉

講談社



李恢成対話集

参加する

言葉

講談社



李恢成対話集

参加する言葉

昭和四十九年十月四日 第一刷発行

著 者 李恢成

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二二二／郵便番号一―二
電話東京(〇三)九四五―一―二二(大代表)／振替東京三九三〇

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社



落丁本・乱丁本はお取り替えいたします
定価はカバーに表示してあります(文1)

©李恢成一九七四

李恢成対話集

参加する言葉

目次

小田実 文学者と祖国 7

白鉄・李浩哲・金承鉦 民族文化と作家意識 49

李浩哲・徐基源 祖国の土に触れて 59

金三奎・鄭敬謨 朝鮮人のころ 77

中里喜昭 激動期の日本と朝鮮 105

五味川純平 原野からの出発 129

西郷竹彦 民族・ことば・文芸 173

篠田正浩 反抗する青春 219

宇都宮徳馬 日韓の癒着とモラル 249

李恢成 あとがき 262

李恢成対話集

参加する言葉

対話1 ■ 小田実

文学者と祖国

1972年3月・群像

小田実

一九三二（昭和七）年大阪生まれ。東京大学言語学科卒業、ハーバード大学留学。帰国後旅行記「何でも見てやろう」を出版。ベ平連（ベトナムに平和を！）市民連合）の中心的存在として活躍した。現在作家、代々木ゼミナール講師。主な著書に、小説「アメリカ」「現代史」「ガ島」、評論集「戦後を拓く思想」「義務としての旅」「世直しの倫理と論理」など多数がある。

編集者 きょうは「文学者と祖国」というテーマでお話したいと思っています。この一、二年、世界の情勢が急転換しようとしており、特に二月には米中会談などもあって、アジアの状況も急激に変転しつつあるように見えます。このようなときに、日本文学者、あるいは「在日朝鮮人文学者」といわれる人たちが現実とどうかかわり合いながら仕事を進めていけるのであろうか。日本と朝鮮、あるいはアジアという視点の中で自分の文学をどう深めていくかというようなことをお話しただけたらと思っております。

小田 個人的な話からでしょうか。在日朝鮮人の側から日本とのかかわり合い、日本人とのかかわり合いについて、主としてそういうテーマで小説を書き、いろんなことが言われて来ているんだけれども、日本人の作家の側から、在日朝鮮人の問題を過去の植民地にした体験を含めて、それとのかかわり合いを書いている作家は、まだまだ少ないと思う。たとえば大阪をテーマにした小説がある場合に、私は大阪の人間のことを書けばまず二つの問題に突き当たる。一つは、在日朝鮮人の問題で、それがきわめて実際的なかたちで人びとの暮らしの中に出てきていますね。もう一つは、被差別部落の問題にぶつからざるを得ない。大阪のことを書いている小説の中でこの二つにぶつかっていない作品があるとすれば、私はうそではないかと思う。それにもかかわらず、まだ、二つの問題を正面きったかたちでとり上げた作品は、少ないみたいな気がする。書かないで済ませている

ことがあると思うのです。在日朝鮮人の問題なら問題を、もう少しこちら側、日本人の側からものと問題にしたらい。作家たるもの、すべきではないかと思う。

私自身の朝鮮とのからみあいをここで考えてみると、四つくらいあるんじゃないかと思うのです。一つは、日本人がもしほんとうに日本の問題を考えるならば、突き当たらざるを得ない問題がある。それは日本が朝鮮を植民地にしたという事実で、それとのかかわり合いというのはいやでもおうでも出てくる。この問題を避けて通ることはできないと思います。これは非常にむずかしい問題で、日本人ひとりひとりの、たとえば私自身の体内にそういう体験に根ざしたものの考え方、感じ方がどれだけあるかということになると、率直に言って非常にあやしいと思うのです。というのは、たとえば私はもうじき四十になるんだけれども、日本が朝鮮を植民地にしていた、つまり、あからさまな抑圧者として存在していたときに、私はまだほんの子供だった。逆に言うと、そのころ子供だった日本人がすでにもう四十歳に達しているということです。

極端な話をしてみたいと思います。かつて韓国へ出かけたときに、三十六年間の植民地統治というものについて、いろんなものにじかにぶつかるだろうと私は覚悟していた。しかし、豊臣秀吉のことなんか考えてもいなかった。韓国で買った歴史の本を見て、私は非常に衝撃を受けたんです。が、そこに「秀吉以前」、「秀吉以後」という時代区分があるのを見て衝撃を受けた。全く関係のない人間だと思っていた秀吉という人物が突然私の視界の中に出てきて非常に困惑を覚えたんです。ある有名なお寺へ行ったときのことですが、期待していたより小さかったので、「小さいですな」と何気なくいったら——何でも私は思ったことを口に出す習慣があるのです。(笑)——そしたら隣の人に少し憤然として「おたくの秀吉が焼いたんですよ」といわれて、愕然とした。そんなものを

秀吉が焼いていると思わなかった。そこで、私は秀吉と自分とのつながりというものがどういふものであるかということを実験にやって考え出したのです。私の体内には「秀吉体験」なんてのはゼロだった。それがつきつけられてきたわけで、といってこの「秀吉体験」をそれじゃおまえ感じろと、ひところはやった「自己の内なるヒデオシ」というようなかたちで感じる、何か抽象的な論理の展開の上で感じられたような気になる、そういうかたちで感じる、というのはウソだ思うのです。じゃあ、どうすればいいのか、という問題になる。それにぶちあたる。今まさにそれにぶちあたっている感じだ。

簡単に「植民地体験」、「自己の内なる朝鮮」といわないで、それがむしろないことをはっきり認めることから、ことがらを出発させる、それよりほかにないという気さえするのです。そういうことがらを実際の作品の中でどう考えるかということが、私の「朝鮮体験」の一つのテーマだと思います。

二番目に考えたいのは、日本人と朝鮮人の歴史的なつながりです。最近、森有正氏の論説を読んだんです。それはフランスに象徴される西洋と日本を比較する論で、これまで書かれた論の中では一番深い形で書かれているのだと思うのですが、その中で、日本人を日本人としての一つの集団としてあらしめているのは何かというと、日本語だと彼は述べていた。それはまちがいのない事実で、佐藤栄作も日本語を使い、私も使っている。豊臣秀吉も使っている。そういう日本語の構造と、フランス語によって代表されている西洋語の構造を比較研究していくといふようなことがあきらかになって来る。森有正氏の論をやるのが目的じゃないから簡単にいってしまふと、日本語においては三人称によって象徴される客観的な事物というのは存在しない。客観的な表現というのはな

い。たとえば、「ここに机がある」という非常に単純な客観的なことを示す文の中においてすら、「机がある」というのか、「机があります」というのか、そこにおいて必ず相手を意識している。つまり、すべてが二人称の關係の中に入ってしまうのではないか。その二人称の關係の中に上下關係というのは必ず存在する。それが日本人の思考を形づくっている。それに対して西洋社会の場合は、三人称的に定立している客観的概念というのがあるだろうということをいうんですね。それはある程度言語的にいえるんじゃないかという気はするんです。

そういうことを論旨にして森有正氏の論はずっといくんだけど、私が何をいいたいかというと、実は、そういう日本語を背負っている日本人と、朝鮮語を背負っている朝鮮人との間の連関性というものなんです。私は朝鮮語というのは少し学んでいるだけで何もできないんだけど、日本語と朝鮮語はもともと同じだという説がいま非常に有力ですね。実際に見ても、朝鮮語の構造自体と、日本語の構造と似ている面がたくさんある。ということは、ものを考えるその根本のところ、朝鮮人と日本人は歴史的にも組んずほぐれつみたいな關係にずっと立ってきたわけですね。最後は日本が植民地にすることによって終わった。これは現在も続いているわけけれども、そういう形で終わったが、日本語を背負っている日本人と朝鮮語を背負っている朝鮮人との間の深い連関というのは、やっぱりあり得るんじゃないか。それはいい意味でも悪い意味でもあるだろう。

私はものを考えるときに、日本―朝鮮だけで考えないほうがいいと思うのです。植民地―被植民地關係の中だけで考える場合は別として、もう少し大きく視野をとって考えたほうがいい場合が多いんじゃないかと思います。朝鮮の場合でも、日本、朝鮮、アジア、ヨーロッパというふうに考え

てみたいと思うのです。普通よくやられる比較というのは、ヨーロッパ対日本、あるいは日本のほかに朝鮮、インドとか、そういうのを全部考えていこうじゃないかというのが私の考えなんですけれども、私のそういう思考過程の中にいまいった問題をほうり込んでみたい。そういう組んずほぐれつみたいな関係の中で、どこが一致してどこが微妙に違っているのかということをもっと知りたいと思うのです。そういうようなことがもっと文学の中に、出て来てもいいのではないかと思う。在日朝鮮人の文学の中にそれはまだ少し出ていないと思うのです。もっと出てきたらいいという気がするし、これは、日本人作家の側でももっと考えるべきことだろうと思う。

三つ目に考えるのは、朝鮮を見る視点の問題です。私は韓国に行ったときに一番最初の印象というのは、アジアの新興国の一つであるという印象でした。私はそういう印象を韓国の人にも非常に強くしゃべった。それはある意味では、新しい見方だったのではないかと思えます。良心的に日本の過去を断罪する人も、日本の過去を忘れてしまつて、朝鮮に対して恩をかけてやったといっている人たちにも共通する態度があつて、それは、日本と朝鮮だけで話を済ましてしまふという態度です。どうしても、日本の過去とのつながりだけで、すべてを語つてしまふ。そうではなくて、アジアの中の一つの新興国として見る。それと日本とのつながりはどうなるかという少し違った見方をする必要があるんじゃないかと思うんです。それは私が考えている、在日朝鮮人文学の一つのアジア文学としてみなすという態度にもつながってくるんですが、日本といつても直接比較するんじゃないか、ほかのアジアの一国の中の問題というものを考える必要があるんじゃないか。これから特にそれが必要じゃないかと思うのです。そうすると現在の南北に分かれている現状というのは、非

常に重苦しくかぶさってくると思いますね。在日朝鮮人の文学が、これからはそれに直面せざるを得ないだろうという気がします。

在日朝鮮人の文学が力強いのは、日本とのつながりというものを、ことに過去とのつながりを出したときに非常に強いんだけど、それから現在の状況の中に置かれている朝鮮人あるいは在日朝鮮人の問題、それと現在の政治状況をからめれば一体どうなるだろうかという問題がやっぱり出てくるし、それは私たち自身の問題だと思うのです。そういう視点で、まだ小説はあまり書かれていないという気がします。

四つ目は、私自身の朝鮮体験というのは、子供のときに闇市で朝鮮人に雇われて、その日暮らしじゃないけれども、そういうことをして暮らしていたのです。そういう体験からいくと、ふだんの暮らしみたいなもの、つまり観念的にとらえるんじゃないじゃなくて、一人の人間として、生身の人間としての朝鮮人、それと日本人とのからみ合いみたいなものが、もっともっと出る必要があるだろうという気がします。そここのところの接近方法みたいなものが少しないんじゃないかという気がする。ことに若い学生たちの議論を聞いていると、そういう気がするんですね。

そういうところも考えておかないと、たとえ入管闘争というののやり方一つを見ていても、いままでのやり方ではうまくいかないというところのことのありようは来ているんじゃないかという気がします。そういうことを感じているところなんで、そういうのが私の朝鮮人とのからみ合いみたいなものです。一人でしゃべってごめんなさい。

李 論すべき問題がいまの話に明らかに入っているという感じはするんだけど……。

話はちょっと変わるけれど、「人間として」の七号の座談会（「言葉と現実」）を読んだわけですが、